

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第7号

《研究ノート》

石器石材としての大川原産珪質岩
黒川 忠広

鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究
―県本土を中心とした集成と若干の考察―
相美 郁恵

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性
東 和幸

志布志市高吉B遺跡出土品の分析結果について
調査課第一調査係, (株)パレオ・ラボ, (株)パリオ・サーヴェイ

鹿児島県内出土のガラス玉の化学分析
中井 泉, 柳瀬 和也, 松崎 真弓, 澤村 大地, 永濱 功治

地域の素材を活用した社会科の学習指導
―地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業を通して―
宗岡 克英

《資料紹介》

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介
上床 真

収蔵遺物保存活用化事業
―堅野（冷水）窯跡の再整理を中心に―
調査課第一調査係

京田遺跡出土木簡のレプリカ製作
―墨書の再検討と実測図の修正―
調査課第二調査係

平成 25 年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2014. 6

『縄文の森から』第7号 目次

《研究ノート》

石器石材としての大川原産珪質岩

黒川 忠広・・・・・・・・ 1

鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究 ―県本土を中心とした集成と若干の考察―

相美 郁恵・・・・・・・・ 9

鹿児島（鶴丸）城下町の計画性

東 和幸・・・・・・・・ 25

志布志市高吉B遺跡出土品の分析結果について

調査課第一調査係

(株)パレオ・ラボ, (株)パリノ・サーヴェイ・・・・・・・・ 33

鹿児島県内出土のガラス玉の化学分析

中井 泉, 柳瀬 和也, 松崎 真弓, 澤村 大地, 永濱 功治・・・・・・・・ 45

地域の素材を活用した社会科の学習指導

―地域にある遺跡や遺物を活用した歴史の授業を通して―

宗岡 克英・・・・・・・・ 51

《資料紹介》

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介

上床 真・・・・・・・・ 57

収蔵遺物保存活用化事業 ―豎野（冷水）窯跡の再整理を中心に―

調査課第一調査係・・・・・・・・ 65

京田遺跡出土木簡のレプリカ製作 ―墨書の再検討と実測図の修正―

調査課第二調査係・・・・・・・・ 83

平成25年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87

万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介

上床 真*

Introducing Chinaware from Southeast Asia excavated in Kamizuru site by the Manose river lower stream

Uwatoko Makoto

要旨

県内出土の中世における東南アジア産陶磁器の出土は比較的多く、本県の地理的位置や交易ルートが要因として注目されている。中でも、万之瀬川下流域遺跡群の資料は特に注目される。今回、既報告の上水流遺跡出土資料の中に新たにタイ・スパンブリ県のバンブーン産の無軸の短頸大壺（14～15世紀）が含まれていたことが明らかとなったので、追加報告を行う。あわせて、若干の検討を行い、本資料が現時点では国内でも数例目の発見であり、14世紀後半～15世紀前半における琉球を介した流通（南島路）を示す資料であることを指摘する。

キーワード 中世 14～15世紀 海域アジア史（アジア海域史） 万之瀬川下流域遺跡群 タイ（アユタヤ王朝）
バンブーン窯跡 コンテナ陶磁器

1 はじめに

平成25年3月末をもって万之瀬川下流域に関する遺跡（持躰松遺跡・渡畑遺跡・芝原遺跡・上水流遺跡）の整理作業・発掘調査報告書刊行が一旦終了した。上記の遺跡では、縄文時代から近世・近代にかけて多くの成果が挙がっており、その中でも中世に関しては、シンポジウムが開催されたり学会誌等で特集が組まれるほど注目を浴びている（金峰町シンポジウム実行委員会編1999・古代学協会2003など）。特に、持躰松遺跡の成果は、南九州の中世が注目されるきっかけとなったと言っても過言ではない。

筆者は上記の発掘調査報告書のほとんどに何らかの形で関わっているが、十分にその責を果たしているかどうかは甚だ疑問である。今回、續伸一郎氏（堺市博物館）と岩元康成氏（鹿児島県始良市教育委員会）からのご指摘で、上水流遺跡出土遺物の中に、あらたに東南アジアに関連する遺物があることが明らかとなった。ここでは、当該資料を紹介するとともに若干の考察を加えてみたい。

2 当該資料について

本資料は、口縁部・胴部・底部のそれぞれで同一個体であるとみられる。いずれも「大溝」とした大型の溝状遺構内からの出土である。以下に本資料の特徴を示す。

いずれも胎土中には砂粒を多く含む。内外面ともに無軸で、灰色である（第1図）。1（報告No.大溝-308）は耳とみられる部分があるが、欠損している。施文は、頸

部よりやや下に、横位に二条の並行する沈線を巡らし、その中に縄文に類似した文様が施される。この文様は、森本朝子氏が「縄簾（すだれ）文」と指摘したものと類似する文様（森本2004）である。なお、今回新たに実物にあたって再検討したところ、実は口縁部は欠損しており、それを石膏で補強したところを誤って口縁部として実測していたことが判明した。そこで、この機会に再実測を行ったところ、口縁部は上方に外反するのではなく、垂口縁状となる可能性が高いことが判明した。

2（報告No.大溝-309）は胴部であり復元径で60cmを測る。最大張り出し部より上位に数条の沈線を横位に施す。

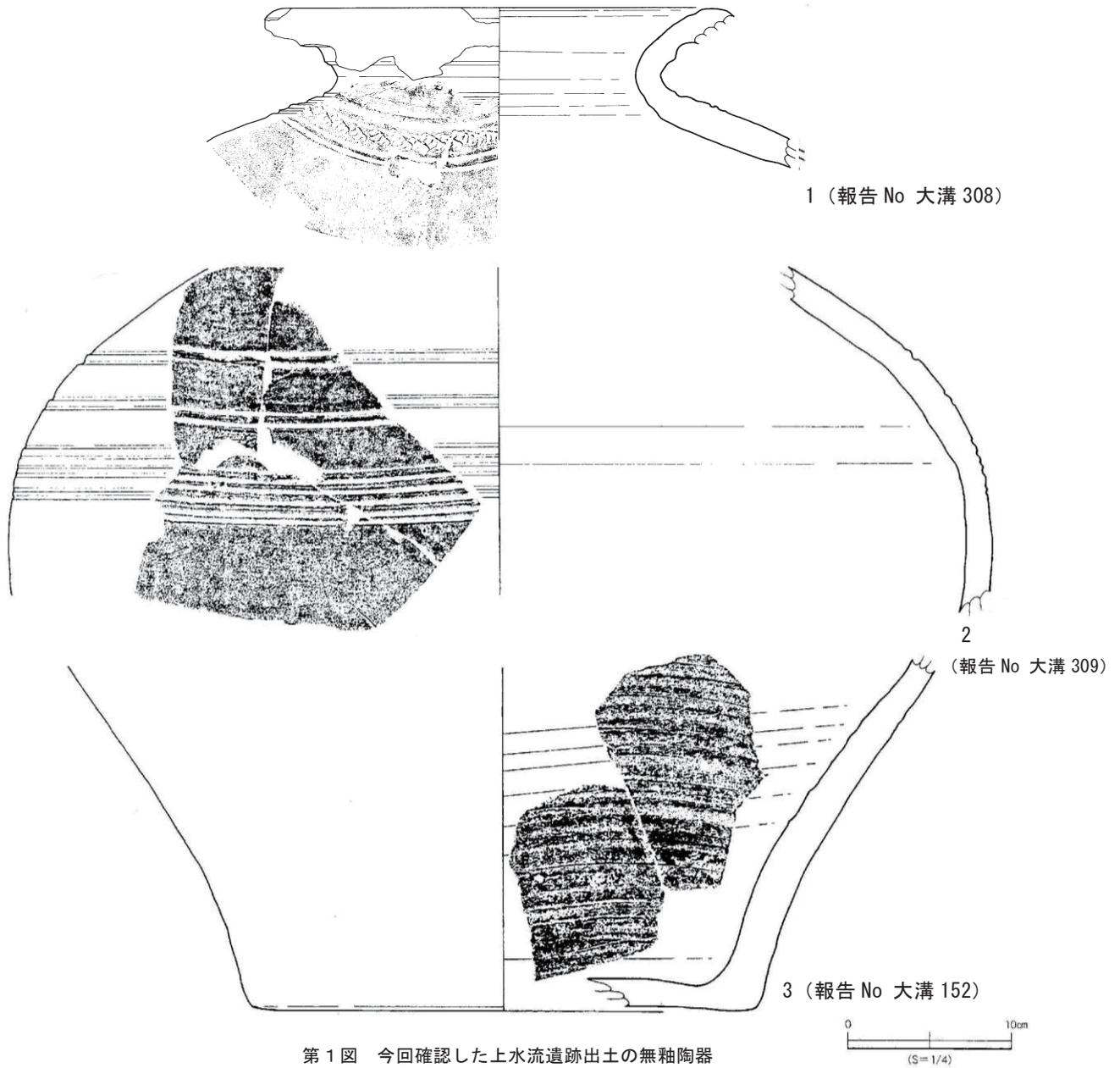
3（報告No.大溝-152）は底部で、底部外面に目跡とみられる白色部分がある。底部の復元径で31.6cmを測る。

当該資料は、報告書を作成している段階では、その質感から「瓦質土器」と考え、1と2については「壺?」、3については「火鉢」としていた。

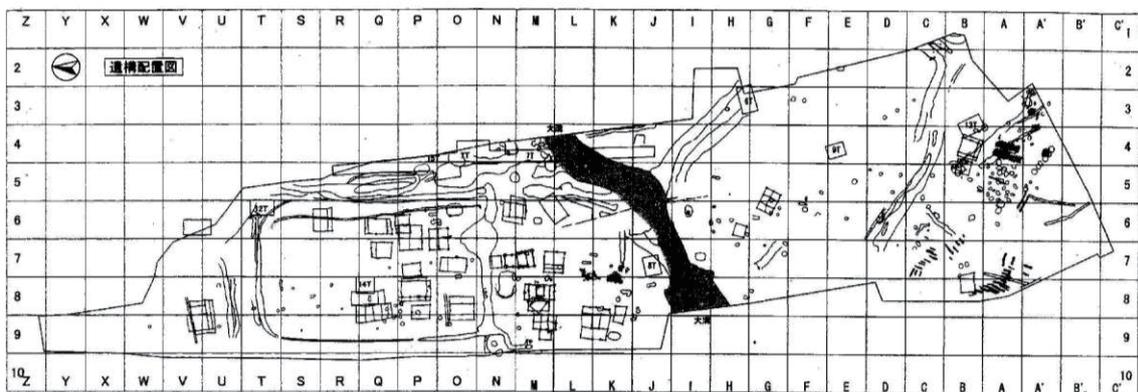
ただし、瓦質土器としても、若干の違和感を覚えつつも他地域での事例や類例について該当する資料を探し当てることができなかった。数人の研究者にも実見していただく機会があり、その際にも「西日本の瓦質土器とは思われない。強いて言うならば琉球の資料中であればもしかしたら存在するかもしれない」という意見もあった。しかしながら、それ以上の追跡を果たすことができずに日々だけが過ぎていき、いつしか記憶の彼方へと追いやられていたというのが正直なところである。

以上のような状況であったが、先述のとおり、本資料

*岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課（鹿児島県派遣）



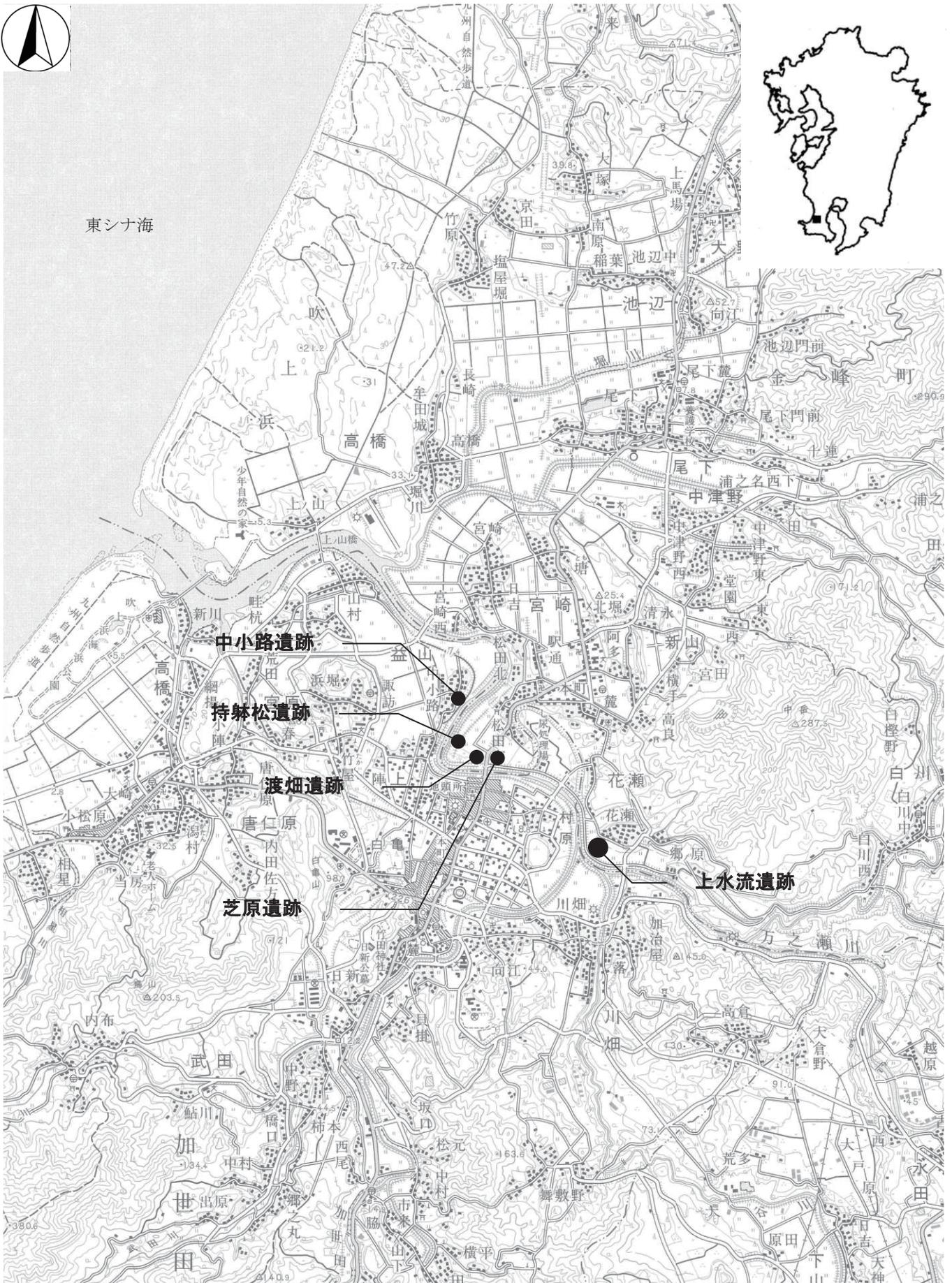
第1図 今回確認した上水流遺跡出土の無釉陶器



第2図 上水流遺跡の中世遺構配置図



東シナ海



第3図 上水流遺跡の位置図(1/50,000)

は東南アジア産の陶器ではないかという指摘があったので、續氏に実現していただいたところ、「タイのバン・プーン窯の製品」で、時期は14世紀後半～15世紀前半頃に該当することが明らかとなった(第5図)。

向井互氏によれば、バン・プーン窯の製品の代表的なものとして、長頸壺と短頸(大)壺があり、そのうち短頸壺は「平底の底部から胴部下位は僅かに窄まるが、すぐに大きく膨らみ、胴部上位～肩部に最大径が位置する。頸部～口縁部はラップ形に外反し、口縁部はL字形に肥厚する。肩部には方形区画内に象や騎馬を表すスタンプ文や三角形の葉文を連続して押捺して巡らせる」という特徴を有する無釉の焼締陶器であるという(向井2012)。

今回新たに発見されたものは、文様に違いはあるものの、器形をはじめとした全体的な特徴はほぼ共通するものであるため、本資料については「タイのバン・プーン窯」の製品である可能性が高いと考える。

なお、県内においては鹿児島神宮(霧島市隼人町)に所蔵されている陶磁器の中に、バン・プーン窯産の無釉陶器がある(鹿児島神宮所蔵陶磁器調査団2013)。ただし、こちらは長頸壺(第5図左上)であり、本資料とは器種が異なる。

3 「大溝」と遺跡周辺の状況について

当該資料が出土した大溝は、調査範囲のほぼ中央部付近を東西に横断するものである(第2図)。安全上の配慮から、万之瀬川に接する部分については調査できなかったため確認していないが、本来はそのまま万之瀬川へとつながっていて注ぎ込むようなかたちであったことが想定される。溝の幅は6～8m程度であるが、最も川側に近い部分では15m程度に広がっている。

遺構内からは、縄文時代前期末から近世までの遺物が出土しており、「溝」という遺構の性格からも出土遺物は決して一括性が高いとはいえない状況である。遺物の中心は、17世紀を中心とした初期薩摩焼や中国・東南アジア産の輸入陶磁器、国産陶器である。特に、輸入陶磁器は多彩であり、古くは白磁碗Ⅳ類(玉縁白磁碗)、龍泉窯系碗Ⅰ類などや、ベトナムのミースエン・フックテイク産の可能性のある焼締陶器長胴壺、タイ産褐釉陶器壺等もみられる。

上水流遺跡の周辺に目を向けると、持躰松遺跡・渡畑遺跡・芝原遺跡をはじめとして、中小路遺跡や白糸原遺跡という中世でも特筆されるような遺構・遺物が発見されている遺跡が存在する(第3図)。

また、万之瀬川下流域である南さつま市の加世田平野からは最近になって、宋風獅子や薩摩塔などの新たな発見が数例あり(橋口2013④ほか)、ますます評価が高まりつつある。その中で、今回の資料は新たな発見となる。

4 各遺跡での事例(第4図)

ここでは、国内各地の類例について概要を述べて紹介したい。

○ヤッチのガマ(沖縄県具志川村字上江洲)

離島である久米島に所在する。「ガマ」は沖縄の方言で、自然洞穴のことである。自然洞穴の中につくられた集団墓地で、完形の壺等を用いた蔵骨器が数多く発見された。その中の1点が、本資料と同様のものであり、国内における唯一の完形資料である。近世の時期に、蔵骨器として転用されていた。

○ハナグスク(沖縄県那覇市若狭)

波上宮の一角について調査を行った際に、本資料と同様の遺物が発見されている。波上宮は、「琉球王国の総鎮守」と呼ばれており(谷川1987)、現在も沖縄総鎮守として信仰されている。

○博多遺跡群(福岡県福岡市博多区)

無釉の大壺が発見されている。頸部の破片で、本遺跡のものと同様と若干類似する。

以上の他に、佐敷グスク(沖縄県南城市佐敷)などでも類似する遺物の出土が確認されている。

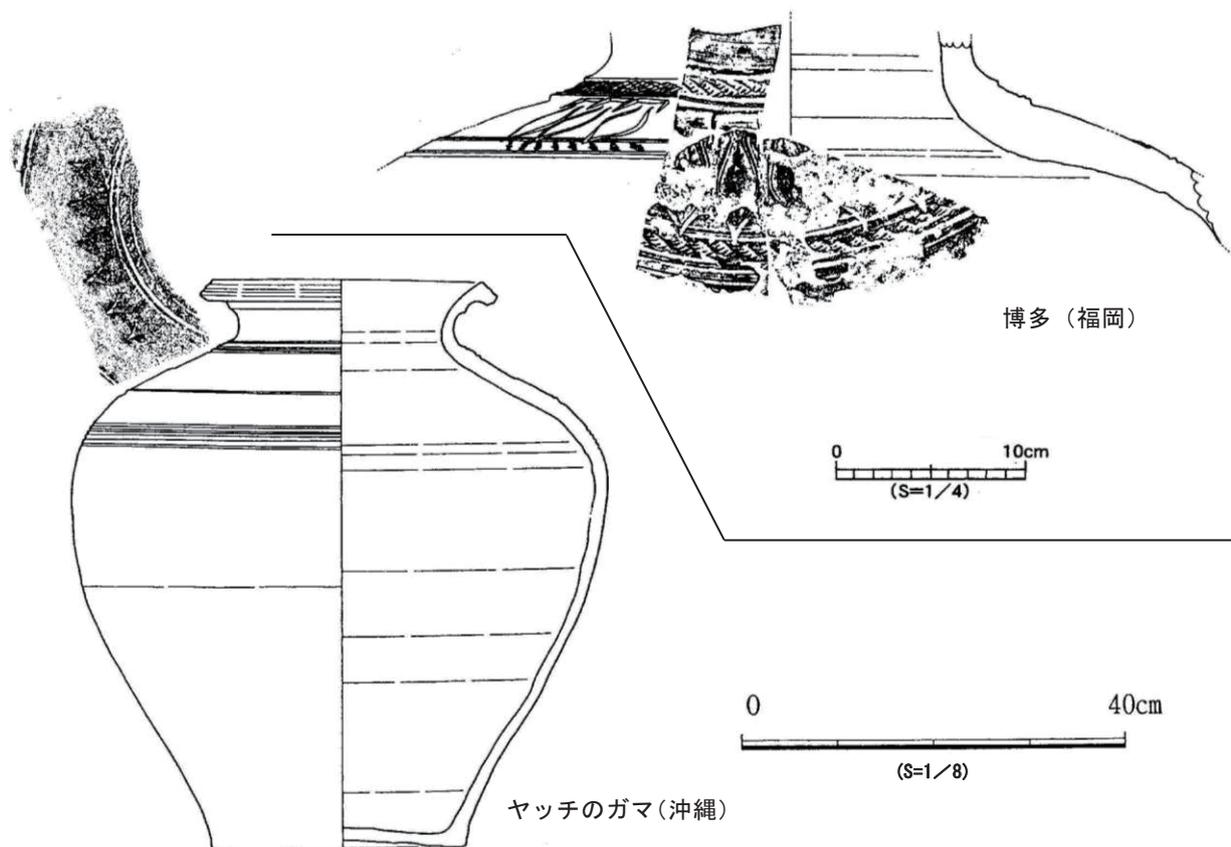
5 タイ産陶器について

筆者は、報告書中では指摘することができなかったが、上水流遺跡においてもタイ産の製品は出土している。「褐釉陶器壺」(第6図)がそれであり、重久淳一氏によれば、南九州における遺跡出土の東南アジア産陶器の中では最も出土例が多いという(重久2004)。向井氏によれば、15世紀中頃の時期で、「シーサッチャナライ」もしくは「メナムノイ」産(向井2013)であるため、本資料よりは若干新しい時期のものである。

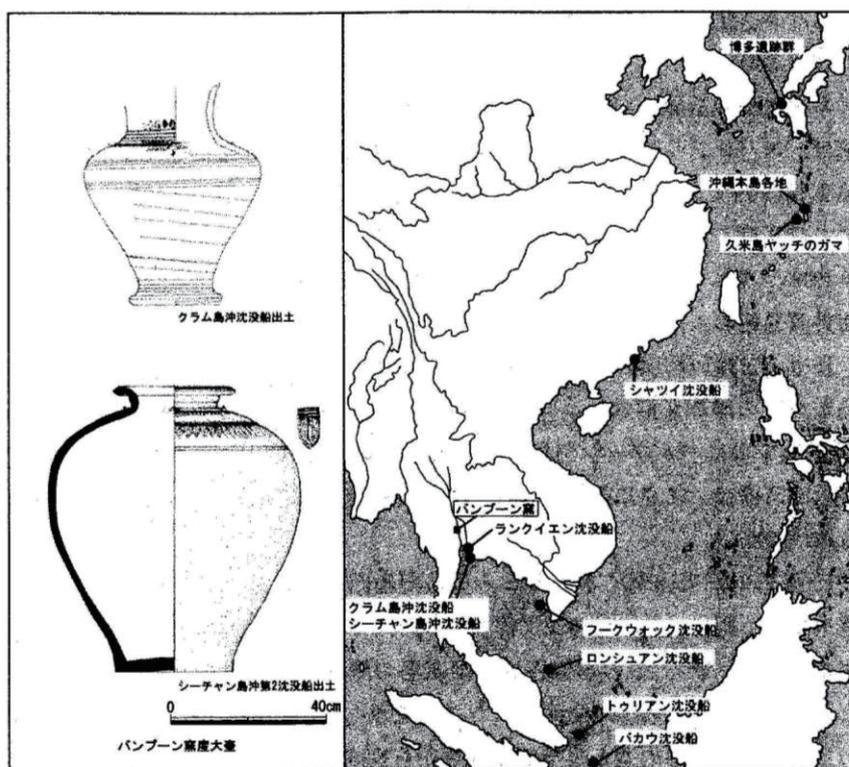
この褐釉陶器壺について、橋口互氏は「当初の用途とは異なる再利用(容器自体の需要により輸入された場合や、貿易品である内容物の容器として運ばれてきた後の再利用など)を含め、日用雑器(日用の「貯蔵・運搬」用容器)として再利用された可能性」を指摘している(橋口2011)。

新田栄治氏は、日本出土のタイ産陶器には、3つの性格があり、それらを①商品 ②商品の内容物の容器 ③貿易従事者の生活用具 であったと指摘している(新田1997・1999)。

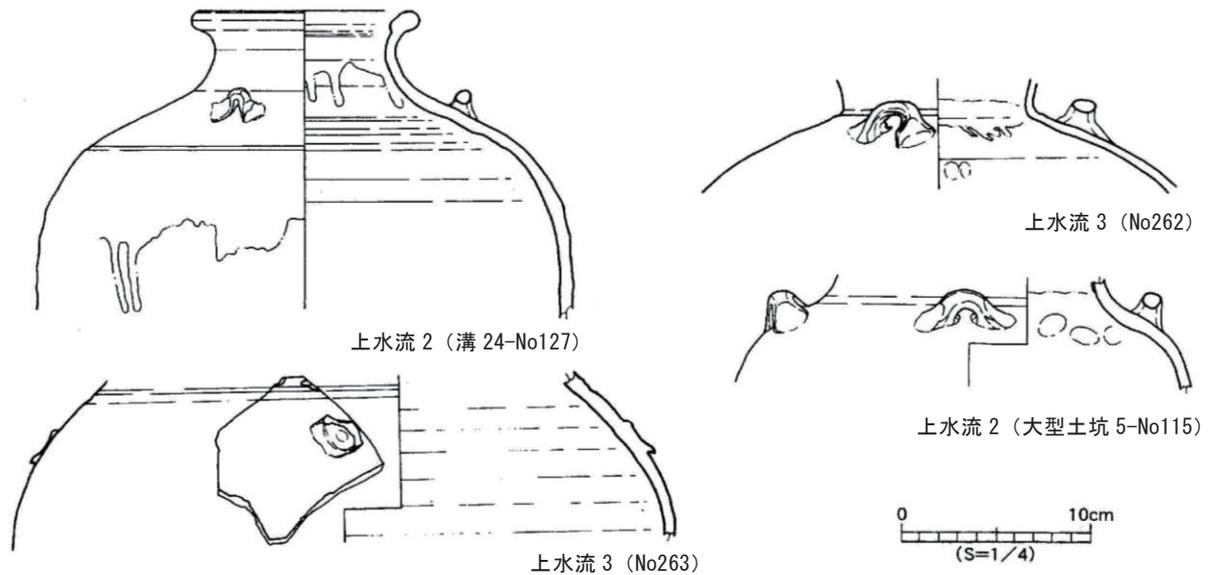
向井氏は、タイの中でも特にチャオプラヤ河川流域での窯跡群が、海外向けコンテナ陶磁器生産としての役割を担っていたことを明らかにしている。また、コンテナ陶磁器の海外搬出は14世紀後葉から開始され、在地向けの壺類を海外向けに振り分けていたとする。15世紀以降については、コンテナ陶磁器として特化したものを生産するようになるという(向井2012)。



第4図 各地から出土したタイ産無釉短頸（大）壺



第5図 バンブーン無釉壺の分布（向井 2013 からの引用）



第6図 上水流遺跡出土のタイ産褐釉陶器壺（シーサッチャナライもしくはメナムノイ産）

本資料は、チャオプラヤ川流域のものであり、14世紀後葉頃のものとするので、まさにタイで生産された海外向けコンテナ陶器としては初期のものとなる。

この時期のタイはアユタヤ王朝（1351～1569）であり、貿易で国力を増強し、その過程では1432年にはアンコールも攻撃して版図に加えている。また、日本とも貿易を行っている（石澤良昭・生田滋編 1998）。具体的には、アユタヤからは綿花・象牙・蜜蝋・香辛料・漆器が、日本からは銀と銅が貿易品として扱われている。本資料のこの中のものを入れる「コンテナ」としてもたらされた可能性がある。では、実際にどのようなルートで上水流遺跡までもたらされたのであろうか。次章では、この問題について検討したい。

6 琉球との関わりについて

亀井明德氏は、明（1368～1644年）の陶磁器の出土数が日本の中でも特に沖縄に集中することに注目し、薩摩以北についても琉球を介して陶磁器がもたらされていることを指摘した（亀井 1993）。

上里氏は、「琉球の朝貢開始の前提となったのは、14世紀中葉における日中間航路の変更である。元末内乱や倭寇活動の活発化により中国沿岸地域の治安が悪化し、従来の博多－明州ルート（大洋路）にかわり、琉球を経由する肥後高瀬－福建ルート（南島路）が一時的に利用されることになった」と指摘している（上里 2008）

ただし、15世紀前半における薩摩と琉球との交易を示す資料は存在しないということであるが、関周一氏は、14世紀末以降に島津氏が中央に対して「唐物」（中国のみでなく東南アジア産品を含む）を献上していることを理由として、島津氏と琉球の間に交易が行われていたことを推測している（関 2003）。

荒木和憲氏は、島津氏と琉球の関係について14世紀末～16世紀について注目して、Ⅶ時期に分類している。その中で、14世紀末～1430年代を「Ⅰ期：貿易関係の形成期」、1440年代～50年代を「Ⅱ期：貿易関係の停滞期」としている。15世紀前半については「島津から見た琉球は重要な貿易相手国ではあるが、必ずしも政治的に重要な存在ではなかった」と指摘している（荒木 2004）。このあたりに、万之瀬川下流域遺跡での出土状況（注1）のヒントが隠されている可能性があるのではないだろうか。

桃木氏は「14世紀後半から日本や朝鮮への東南アジア船来航記事が登場し、明朝へのチャンネルを握ることで成長した琉球やマラッカに東・東南アジア諸国の商船が集まり始めた。これまで中国大陸を介して間接的に繋がっていたふたつのシナ海の扉が開き、直接交流が盛んとなった」とまとめている（桃木編 2008）。

本遺跡の資料も、上記のような大きな流れの中で評価できる資料といえよう。

7 まとめ

本資料は、タイのチャオプラヤ川流域に位置するバン・プーン窯の製品であり、時期は14世紀後半～15世紀前半頃に該当することが明らかとなった。同遺跡からもタイ産の陶器が出土しており、また県内からもほぼ同時期のタイ産陶器も出土している。しかしながら、いずれも時期や器種が異なるので、本資料は県内では初めての例となった。また、琉球と北部九州から出土していることを確認したが、国内においても出土例はごく少数であるので、本資料の例は注目に値するといえよう。

流通については、現状からの推測ではあるが、琉球からの出土例が十数例ある（注2）ことを踏まえると、「琉

- 物館研究報告』92
- 谷川健一編 1987『日本の神々―神社と聖地―』13 南西諸島
白水社
- 那覇市教育委員会 1999「ハナグスク」『那覇市教育委員会文化
財調査報告書』第41集
- 新田栄治 1997「知覧城出土のタイ産陶片と薩摩の海外貿易」
『知覧文化』第34号 知覧町立図書館
- 新田栄治 1998「近世薩摩出土の東南アジア陶磁と薩摩の海外活
動」『海洋国家・薩摩―薩摩に鎖国はなかった―』鹿児島
県歴史資料センター黎明館
- 橋口亘 2002「鹿児島県域における16世紀～19世紀の陶磁器の
出土様相」『鹿児島地域史研究』No.1 『鹿児島地域史研究』
刊行会
- 橋口亘 2011「南九州出土の東南アジア産陶器についての一考
察」『陶磁器流通と西海地域』周縁の文化交渉学シリーズ4
関西大学文化交渉学教育研究拠点
- 橋口亘 2013①「南さつま市加世田益山の八幡神社現存の宋風獅
子―中世万之瀬川下流域にもたらされた中国系石獅子―」
『南九州文化財研究』No.18 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2013②「南さつま市加世田川畑残存の薩摩塔」『南九州
文化財研究』No.19 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2013③「南九州市川辺町宮の飯倉神社現存の宋風獅子」
『南九州文化財研究』No.19 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘 2013④「中世前期の薩摩国南部の対外交渉史をめぐる考
古新資料―南さつま市芝原遺跡出土薩摩塔と三島村硫黄島発
見の中国陶磁器を中心に―」『鹿児島考古』43号 鹿児島県
考古学会
- 橋口亘・松田朝由 2013①「南さつま市芝原遺跡出土の中国系石
塔(1)」『南九州文化財研究』No.16 『南九州文化財研究』刊
行会
- 橋口亘・松田朝由 2013②「南さつま市芝原遺跡出土の中国系石
塔(2)―万之瀬川下流域から発見された薩摩塔―」『南九州文
化財研究』No.17 『南九州文化財研究』刊行会
- 橋口亘・松田朝由 2013③「南さつま市加世田小湊『当房通』の
薩摩塔―万之瀬川旧河口『唐坊』比定地の中国系石塔―」
『南九州文化財研究』No.20 『南九州文化財研究』刊行会
- 續伸一郎 2012「堺環濠都市遺跡における『南蛮貿易』期の貿易
陶磁器」『貿易陶磁研究』No.32 日本貿易陶磁研究会
- 向井互 2012「タイ産コンテナ陶磁器の海外搬出様相」『貿易陶
磁研究』No.32 日本貿易陶磁研究会
- 向井互 2013「タイ・ミャンマーの陶磁生産と海外輸出」アジ
ア考古学四学会編『アジアの考古学1 陶磁器流通の考古学
日本出土の海外輸出』高志書院
- 桃木至朗編 2008『海域アジア史研究入門』岩波書店
- 森本朝子 2004「博多出土の東南アジア陶磁について」『陶磁器
が語る交流―九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器
―』東南アジア考古学会
- 森村健一 2008「東アジア世界を見た龍顔・薩摩における茶の湯
文化―上水流遺跡を定点として」『上水流遺跡』2 鹿児
島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)
- 吉岡康暢・門上秀叡 2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社